

「吉本隆明」とは何か？

—「なぜ書くか」について—

Ver. 2016-03-11

宮下英明 著



「吉本隆明」とは何か？ ——「なぜ書くか」について

本書について

本書は、

<http://m-ac.jp/>

のサイトで書き下ろしている『「吉本隆明」とは何か？——「なぜ書くか」について』を PDF 文書の形に改めたものです。

文中の青色文字列は、ウェブページへのリンクであることを示しています。

目次

はじめに	1
1 一般名詞「吉本隆明」	5
2 自意識	9
2.1 習慣に違和感 → 自意識	10
2.2 違和感の契機：成長，時代 / 情況	11
2.3 違和感の処理：観念世界の構築	13
2.4 主体的であろうとする：＜習慣を拒む＞を行為する	14
3 <書く>	17
3.1 <書く>の意味 / 役割	18
3.2 大量書きの意味	19
3.3 詩	21
3.4 論理・体系・理論	23
4 批判	27
4.1 「批判」の意味	28
4.2 革命イデオロギー —— 悪者論	38
4.3 「人間喜劇」を書く	32
5 井の中の蛙	35
5.1 引っ込みがつかない	36
5.2 <自分が反抗しないもの>を立てる	38
5.3 前衛イデオロギー	40
5.4 哲学の窮屈	41
5.5 「複雑系」のモデル	45
5.6 自然	46
5.7 加齢	48
6 無理矢理	51
6.1 愚の退治	52

6.2 自家撞着	54
6.3 反の反で，肯定	56
7 「吉本隆明」批評作法	59
7.1 生き様	60
おわりに	63

はじめに

菅野覚明著『吉本隆明——詩人の叡智』（講談社）が、先日出版されたところである。シリーズ「再発見 日本の哲学」のうちの一つとなっている。

これを読み、そして書名に返って、なるほどと感心した。

「吉本隆明」はこのような主題なのだと、得心したわけである。

わたしにとって「吉本隆明」は、『擬制の終焉』（現代思潮社）であった。そしていま、菅野覚明『吉本隆明』から吉本隆明のテキスト「なぜ書くか」を教えてもらうことになった。

「なぜ書くか」（『われらの文学 22 江藤淳吉本隆明』1966

/ 吉本隆明全著作集 4, pp.652-660）

（以下、引用のページ数は、『著作集 4』による）

習慣的なく書く>からは、「なぜ書くか」の問いは出て来ない。

「なぜ書くか」の問いが出て来るときのその<書く>は、<詩を書く>である。

「吉本隆明」を論じることは、「詩人」を論じることである。

わたしはなぜ文学に身を寄せてきたのだろうか？わたしはなぜ一般に文学とよばれている対象のほかにも表現を移したりしながら、<書く>者であることをやめないのだろうか？表現者（書くもの）という位相は、なぜ個人の内部で存続しうるのだろうか？

かつては、わたしもこの種の問いかけをじぶんに課すことを知らず、ただ知識にたいする欲求や感性的な解放だけをその都度味いながら

無意識に〈書い〉ていた。……

しかし、ここ数年来、なぜ文学に身を寄せるか、なぜ〈書く〉かという素朴な問いをじぶんに発するようになった。

(「なぜ書くか」 p.652)

いま、わたしの「吉本隆明」は、「なぜ書くか」と『擬制の終焉』のセットである。

「なぜ書くか」を以て書いて現れるのが『擬制の終焉』、という受け取りである。

他は全く無視というわけであるが、コアの捉えならこれでよいと思う。

そしてこれを機に、わたしの「吉本隆明」を書いておくことにした。

1 一般名詞「吉本隆明」

吉本隆明について書くとは、「吉本隆明はこのようなものだ」を書くことである。

「このような」は、形である。

吉本隆明について書くとは、吉本隆明の形を書くことである。

一般に、何かについて書くとは、その何かの形を書くことである。

なぜ書くものが形なのか？

——形が、求めるものだからである。

形を求めてどうするのか？

——その形のあてはめをやったり、他の形との比較をしたりする。

それをすることにどんな意味があるのか？

——ひとが、物事を知る・わかるとは、こういうことをすることである。

吉本隆明の形は、カギ括弧を用いて「吉本隆明」と表される。（これは、カギ括弧の用法の一つである。）

こうして、本テキストの標題となる：

「吉本隆明」とは何か？

そして本テキストは、つぎのように答えるものである：

「吉本隆明」とは、〈書く〉を「自意識」「主体」の方法にしている者のことである。

あるいは、この方法そのものである。

1 一般名詞「吉本隆明」

この「吉本隆明」のあてはめをやれば、程度の違いは当然あるが、あてはまる者はそこかしこにいる。

——「吉本隆明」は、そこかしこにいる / ある。

2 自意識

- 2.1 習慣に違和感 → 自意識
- 2.2 違和感の契機：成長，時代 / 情況
- 2.3 違和感の処理：観念世界の構築
- 2.4 主体的であろうとする：
 <習慣を拒む>を行為する

2.1 習慣に違和感 → 自意識

「吉本隆明」は、自意識の一類型を指す名称である。

「自意識」とは、《他ならぬ自分》の意識である。

卑近には、思考・行動において他とは同じでないことを現すふうになる自分——《他とは違う自分》——の意識である。

ひとは、自意識をもたねばならないようにできている。

即ち、自意識をもたねば生きられないというふうになっている。

翻って、〈生きる〉には、〈自意識をもてるようにする仕方を有していて、これを行っている〉が含意される。

「吉本隆明」の自意識が対する「他」は、習慣（社会）である。

習慣に従順であり、そして習慣への従順を当然のこととして周りに強いてくる者たちが、「他」である。

この自意識のものは、習慣に対する違和感である。

習慣に対する違和感が、《自分は習慣に抗う——自分の他は、習慣に従順な者たちである——自分は他とは違う》が形の自意識に進む。

これが「吉本隆明」である。

2.2 違和感の契機：成長，時代 / 情況

「吉本隆明」とは、習慣に対する違和感から《自分の他は習慣に従順な者たちである——自分は他とは違う》の自意識に進む者のことである。

習慣は、大人の世界である。

子どもから大人への成長過程で、習慣が外からやってくる。

それは、自分の都合ではない。

自分の都合ではなくて外からやってくる——それは不条理である。

習慣は、不条理である。

こういうわけで、習慣に対する違和感の最も自然な契機が、成長である。

習慣の内容、そして成長過程でその習慣が外からやってくるタイミングは、「時代 / 情況」の内容である。

この意味で、時代 / 情況は、習慣に対する違和感の契機である。

「吉本隆明」は、習慣に対する違和感の決定的な契機に時代 / 情況がなっている場合である。

「成長」「時代 / 情況」のことばを用いて以上述べたことは、つぎの一節の解説である：

このような自己資質は、少年のある時期に〈書く〉ものにとっても〈書かない〉ものにとっても共通のもので、したがって文学とはかかわりのないものである。文学は、あきらかに習慣の世界が心を占有したときに、はじめて完全にはじまる。そして、人はだれでも自

己資質の世界が喪失する過程よりも、〈書く〉という習慣の世界が
かるうじて早くやってきたとき表現者になり、ややおくれてやって
きたとき表現者でないのではないか？（「なぜ書くか」 p.654）

2.3 違和感の処理：観念世界の構築

違和感の処理法は、「それは違う、本当はこうだ」をつくることである。
つくった「それは違う、本当はこうだ」の自己評価において満足が得ら
れるほど、違和感の処理が成る。

さらに他から高い評価をする者が現れてくれば、それは自分の満足の裏
付けになるわけであるから、違和感の処理度が高まる。

「それは違う、本当はこうだ」をつくることは、実在しないものをつく
ることである。

これは、観念世界をつくることである。

2.4 主体的であろうとする：〈習慣を拒む〉を行為する

自意識にとっての習慣は、違和感のレベルでとどまるのではない。
習慣は、自分に《その中に入っていくか、それともこれを拒むか》の選択を強いてくる。

習慣の中に入ることは、自意識を睡らせることである。

習慣を拒むとは、〈習慣を拒む〉を行為するということである。
習慣を拒むことは、生き方をややこしくすることである。
ややこしい人間になることである。

習慣を拒むことの謂いが、「主体的」である。
主体的であるとは、〈習慣を拒む〉を行為し続けねばならないということである。
ややこしい生き方をしていかなばならないということである。
ややこしい人間をやっていくということである。

「吉本隆明」は、主体的であろうとする者である。
〈習慣を拒む〉を行為し続けることを、択ぼうとする者である。

3 <書く>

3.1 <書く>の意味 / 役割

3.2 大量書きの意味

3.3 詩

3.4 論理・体系・理論

3.1 <書く>の意味 / 役割

習慣に対する違和感は、どう処理するか？

<習慣を拒む>は、どう行為するか？

主体的である自分は、どうやって得るか？

ひとはこのとき、いろいろな方法を現す。

そしてこの一つに、<書く>がある。

習慣への違和感を、<書く>を以て処理する。

行うことは、観念世界を書くことである。

<習慣を拒む>を、<書く>を以て行う。

行うことは、習慣の書き方を拒みつつ「本当のこと」を書いて示すことである。

ここに、《観念世界を書く》と《習慣の書き方を拒みつつ「本当のこと」を書いて示す》が重なる。

「主体的自分」は、以上のことを行為する自分である。

「吉本隆明」とは、「主体的自分」を以て自身を保とうとする者のこと、ないしこの方法そのもののことである。

3.2 大量書きの意味

「吉本隆明」を考える上で、「書く量の多さ」は重要な視点になる。

習慣は山ほどある。

個々に《本当のことを書いて示す》をやっていたら、<書く>は際限のないものになる。

書く量の多い者は、際限のない<書く>が性癖になった者である。

このタイプの<書く>は、分野が多岐にわたることとわかる。

この「際限のない<書く>」は、吉本隆明では「小刻み」「懸垂」のことばを用いたつぎの言い方になる：

この世界の空気を大きく吸いこみ、強く吐き出すという形はしだいに影をひそめ、この世界の空気を小刻みに吸いこみ小刻みに吐き出すのだが、わたしが覚えこんだことは、吐く息は、おわりのほんの少しを懸垂状態のままにして、つぎの吸いこみに接続するという方法である。このことは、おそらく生存することの辛さの感じと対応している。そして、きっとそのために、わたしはわたしの<書く>ものについて峠をこしたとか、完成されたとかいう感じをもったことはなく、いつも過渡状態にあるような懸垂感しか覚えたことはない。（「なぜ書くか」p.658）

ちなみに、「小刻み」「懸垂」の単位は、時代によって変わる。

紙媒体の時代は、テキストが最小単位になる。

いまのネット媒体の時代には、節や章が単位になれる。

実際、今日は「つぶやき」が最小単位になる。

なお、吉本隆明が「小刻み」を解釈して言うところの「生存することの辛さの感じと対応している」は、わたしなら身も蓋もなく「時間との格闘の作業を効率的にしようとしたら、この方法になる」と言うところである。

わたしの目には、吉本隆明の書くものに<体裁>がいつもちらついて見える。そこで翻って、<体裁>の意味を考えることになる。

上の文章の場合だと、吉本隆明に<体裁>をとらせているのは、《隙をみせたら突いてくる<敵>に対し、自分の作品がその都度雑駁》の自覚である。この雑駁は、突かれてしかるべきとなる。そこで、先手を打っておこうとなり、「生存することの辛さの感じと対応している」の言い回しになる。

あるいは、「生存することの辛さ」に「隙をみせたら突いてくる<敵>」を含めて読んでやるべきか。

さて、大量書きをやると、繰り返しパターン（汎用パターン）が現れてくる。

これは、<形式>である。

<形式>が浮かぶと、これまで書いてきたものを<形式>でもって再構成するという思考になる。

そしてこれを行うと、一つの論理体系 / 理論ができあがる。

吉本隆明の『共同幻想論』『言語にとって美とは何か』は、こうしてできあがったものである。

この場合、テーマ / 標題は、論述作業の出発ではなく、結果である。

3.3 詩

習慣に抗う<書く>は、<書く>の習慣（社会）とも抗うものになる。<書く>の習慣に抗うこの<書く>が書くものは、何と呼ぶことになるか？

「詩」である。

吉本隆明の詩論が、ここで符合する。

「詩」を書くことは、<書く>の習慣（社会）とつぎの関係になることである：

わたしは、きっと、文学の世界に身を寄せても文学者の世界に身を寄せることはもっとも少ない人間であるとおもう。また、思想の世界に身を寄せても、思想者の世界に身を寄せることのもっとも少ない人間である。また、職業の世界に身を寄せても職業者の世界に身を寄せることのもっとも少ない人間であるにちがいない。

（「なぜ書くか」p.656）

吉本隆明は、学術も行う。

上に模すと、この場合はつぎのようになる：

わたしは、きっと、学術の世界に身を寄せても学術の世界に身を寄せることはもっとも少ない人間である。

「身を寄せても身を寄せることはもっとも少ない」の関係は、詩人が習慣社会に対し一方的に距離をおくという関係ではなく、習慣社会も詩人に対しては距離をおくという関係である。

実際、習慣社会は、詩を持ち込まれときには、持て余すしかなく、無視するのみとなるところである。

習慣を拒む者は習慣の側からも拒まれる者になるのが道理である。

吉本隆明の行う学術は、学術の習慣において規格外・仕様逸脱になる。

それは、詩である。

学術の習慣が応じられるものでなく、学術の習慣はこれを無視する。

どういうことか？

学術の習慣が応じる学術は、この規格・仕様に身を合わせてきたものである。

規格・仕様に身を合わせるとは、<先行研究に上乘せ>の形に自身を整えるということである。そして、<先行研究に上乘せ>の形に自身を整えられるのは、比較的こじんまりした領域ということになる。

「本当のこと」を言おうとする詩は、ひどく原理的で、そしておおぶるしきを拡げるものになる。

原理的・おおぶるしきには、「先行研究」にぴったりはまるものなどない。

原理的・おおぶるしきは、「上乘せ」のこじんまりした形をとれない。

そしてこれを承知で無理矢理規格・仕様に合わせようとするのは、それこそ「詩」の拒否するところである。

3.4 論理・体系・理論

「吉本隆明」の<書く>は、<詩を書く>である。

<詩を書く>は、<習慣の書き方を拒みつつ「本当のこと」を書く>である。

書くことになるものは、観念世界である。

観念世界は、「本当のこと」だと証しつつ書く。

推論・論証が、観念世界構築の方法である。

そこで、できあがる観念世界は、一つの論理体系である。

さらにいえば、理論である。

「詩」は、「感情表現」のイメージがある。

論理を拒否し、意味を拒否するイメージがある。

しかし、「吉本隆明」が書く詩は、理論である。

理論であっても「詩」であるのは、あくまでも観念世界だからである。

ここまでをまとめておこう：

詩の観念世界に対する現前（実在世界）は、習慣の世界である。

詩は、習慣の拒否であり、よって現前の拒否である。

これは、観念世界の構築になる。

そして、この構築行為には自己確証が含意にある。

——そうでなければ、構築行為はただ無意味である。

自己確証は論理的行為であり、論理体系 / 理論をつくる。

しかし、これは「詩」のことばの用法のひどい逸脱にならないか？

実際、たとえば数学は「詩」だというふうにならないか？

わたしは、つぎのように答える者である：

「習慣の拒否・現前の拒否をコンテクストにして構築された数学は、詩である。」

すなわち、「詩」は、「数学」と横に並ぶカテゴリーではない。

「詩」かどうかを判じる規準は、書く主体の精神的位相であり、書かれる内容ではない。

こういうわけで、つぎの結論に至る：

「吉本隆明」の著作は、詩である。

『著作集』は、詩集である。

4 批判

4.1 「批判」の意味

4.2 革命イデオロギー

4.3 「人間喜劇」を書く

4.1 「批判」の意味

「批判」は、現前を新解釈することである。

それは、〈有る〉に対し、この〈有る〉の意味・理由を示すことである。

〈有る〉の意味・理由を示すことは、これの含意として「この〈有る〉は、この程度に有るのが分相応である」を示すことになる。

「この〈有る〉は、この程度に有るのが分相応である」が輿論形成に進むと、これはさらに現前の変革に進む。

これが、「批判の行動性」というものである。

世の中には、「批判」を生業とする者がいる。そしてそれらの中には、自分の時間が限られているという思いから、「批判」の成果を求めるのにせっかちな者がいる。

彼らは、輿論形成と現前の変革を、むりやり駆動し進めようとする。

このむりやりが通るとき、いろいろ拙いことが起こる。——だから「むりやり」というわけである。

「批判」が陥る「むりやり」とは？

ものごとに「正しい・間違い」をつけるというむりやりである。

「国論二分」という現象がある。

これは、一方が正しくもう一方が間違いというのではない。

どっちもどっちということである。

すなわち、どっちも功罪相半ば——「功罪」の内容が違ってくるだけ——ということである。

ものごとは、「正しい・間違い」ではない。

〈有る〉は、系の定常均衡を体現している。

〈有る〉は、有るべくして有る。

この〈有る〉を「有るべきでない」というふうに見させるものは、〈愚かさ〉である。

実際、「この〈有る〉は、有るべきでない」を行為することは、系の破壊である。

「批判」は、「この〈有る〉は、この程度に有るのが分相応である」を説明するものである。

「批判」の出来・不出来は、「この程度」の捉えの出来・不出来である。

4.2 革命イデオロギー —— 悪者論

「批判」は、現前を新解釈することである。

それは、〈有る〉に対し、この〈有る〉の意味・理由を示すことである。

〈有る〉は、系の定常均衡を体現している。

〈有る〉は、有るべくして有る。

〈有る〉は、「この程度に有るのが分相応」を示している。

しかし、「批判」は、容易に「この〈有る〉は、有るべきでない」を言うものになる。

〈退治したいもの〉——悪者・バイ菌・害悪——を立て、「批判」を退治の方法に定める。

これは「批判」の誤用である。

一方、革命イデオロギーでは、これがまさに「批判」の意味・形になる。ものごとに「正しい・間違い」をつけ、「この〈有る〉は、有るべきでない——悪者・バイ菌・害悪であり、退治すべき」を唱える。

実際、革命イデオロギーの本質は、潔癖症である。

社会の汚物を見つけ出しそれを一掃することに、執念を燃やす。

「批判」は、悪者論・バイ菌論・害悪論をやることである。

革命イデオロギーの潔癖症は、同じ潔癖症の者には清く見える。

社会における「汚物」の意味がまだ見えない若者には、清く見える。

彼らは、革命の尖兵になる。

行うことは、「大人」退治である。

革命はきまって大量殺戮になる。

「悪者・バイ菌・害悪」退治だからである。

革命の向かう先は、人・組織・社会の破滅である。

「悪者・バイ菌・害悪」は有るべくして有るものだからである。

吉本隆明の「戦争責任論」での個人名指しの「批判」は、悪者論・バイ菌論・害悪論である。

実際、このときの吉本隆明は、革命イデオロギーの者である。

吉本隆明が〈時の人〉であったのは、この時である。

それは、革命イデオロギーが状況の要素であった時である。

以後、革命イデオロギーは急速に陳腐化する。

吉本隆明の「戦争責任論」は、テーマ（「自己保身・自己欺瞞」）は普遍的である。しかし、道具立ての陳腐化は、いかんともしがたい。——道具立ての陳腐化、それは革命イデオロギーの陳腐化である。

4.3 「人間喜劇」を書く

批判は、批判対象を貶めるものになりやすい。

それは、批判対象と同じ土俵に自分を立たせるからである。

同じ土俵に立つと、地所争いになる。

争いに勝とうとして、批判対象を貶めることをやる。

この批判の場合、批判対象を自分の横に見ている。

ところで批判の視座としては、この<横から見る>に対し、<上から見る>（鳥瞰）があり得る。

<上から見る>では、地所争いはなくなる。

争いに勝つために批判対象を貶めるということも、無用のことになる。

そして、<上から見る>とき、批判対象はそれ固有に一生懸命であることが見えてくる。

批判対象に愛情がもたれてくる。

この位相で書かれる批判は、「人間喜劇」である。

吉本隆明は、アンチテーゼ型の批判をひとしきりやった後、「アンチテーゼの不毛」を言って、理論を構築する者になることを宣言する。（例えば、『共同幻想論』の序。）

吉本隆明は、「アンチテーゼの不毛」から直ちに理論に跳ぶ。

<「人間喜劇」を書く>を理論と併行するということは、しなかった。

<「人間喜劇」を書く>をやっておかない——このことの含蓄は？

吉本隆明のアンチテーゼ型批判の対象になったものは、<有ることが間

違いだったもの>として留められることになる。

これは、吉本隆明自身に返ってくる。

自分は、<有ることが間違いでないもの>然として生きていかねばならない。

この窮屈を負っていくことになる。

註：もっとも、この窮屈さ加減が、吉本隆明を「吉本隆明」にしているものである。この窮屈から自分を解放しようとしたら、「吉本隆明」は無くなる。

5 井の中の蛙

- 5.1 引っ込みがつかない
- 5.2 <自分が反抗しないもの>を立てる
- 5.3 前衛イデオロギー
- 5.4 哲学の窮屈
- 5.5 「複雑系」のモデル
- 5.6 自然
- 5.7 加齢

5.1 引っ込みがつかない

批判を「自分が正しい」でやると、「どうやらしくじったようだ」になったときに困ることになる。

自分のいまの立論は、後で必ず「どうやらしくじったようだ」になる。経験が浅いと、これがわからないので、「自分が正しい」をやってしまう。特に、若いうちは、「自分が正しい」をやってしまう。

「どうやらしくじったようだ」になったとき、ひとは《引っ込みのつかない立場に自分は立ってしまっている》の思いになる。

批判を闘いにして、多数を観客に巻き込むことをやってきた者は、なおさらである。

そして、自分のしくじりの糊塗に進んでしまう。

これは矛盾である——矛盾の構造はつぎのようになる：

自分は、習慣を拒否する行動として、〈書く〉をとった。

《引っ込みがつかない》は、習慣の一つである。

そしていま、《引っ込みがつかない》の構えをとる者に自分を成してしまっている。

吉本隆明の場合、この問題はどういうふうになったか？

吉本隆明は、「転向論」でもって、《引っ込みがつかない》の思いで自分のしくじりの糊塗をする者たちを名指しで批判してきた者である。

吉本隆明は、「転向論」が自分に返りこれに復讐される者にはなっていないのか？

わたしは彼の数点の著書しか読んでいない者なので、判断はできない。

よって、この論の続きは、保留である。

ここでは、論点のメモということで、一節を設けておく。

5.2 <自分が反抗しないもの>を立てる

菅野覚明『吉本隆明——詩人の叡智』の「第2章 固有時との対話」の中に、吉本隆明「日本のナショナリズム」から引いたつぎの文がある：

井の中の蛙は、井の外に虚像をもつかぎりは、井の中にあるが、井の外に虚像をもたなければ、井の中にあること自体が、井の外とつながっている、という方法を択びたいと思う。

文脈がわかる程度に文の前後を拡げて引用してみる：

〔鶴見の〕この見解は、当然、ソ連や中共やアメリカが友であり、日本の大衆は敵であるということが、条件次第では可能であるという認識を含むものである。わたしは、ソ連や中共やアメリカにどんな虚像ももたないことを代償として、日本の大衆は敵であるということが条件次第では可能であるという認識にたいしては、鶴見の断定に反対したい。あるいは、あるはにかみをもって、沈黙したい。インターナショナリズムにどんな虚像をももたないということ代償にしてわたしならば日本の大衆を絶対に敵としないという思想方法を編みだすだろうし、編みだそうとしてきた。井の中の蛙は、井の外に虚像をもつかぎりは、井の中にあるが、井の外に虚像をもたなければ、井の中にあること自体が、井の外とつながっている、という方法を択びたいと思う。これは誤りであるかもしれぬ、おれは世界の現実を鶴見ほど知らぬのかも知れぬ、という疑念が萌さなではないが、その疑念よりも、井の中の蛙でしかありえない、大衆それ自体の思想と生活の重量のほうが、すこしく重く感ぜられる。生涯のうちに、じぶんの職場と家とをつなぐ生活圈を離れることもできないし、離れようとしなくて、どんな支配にたいして

も無関心に無自覚にゆれるように生活し、死ぬというところに、大衆の「ナショナリズム」の核があるとすれば、これこそが、どのような政治人よりも重たく存在しているものとして思想化するに価する。ここに「自立」主義の基盤がある。

(『ナショナリズム』(筑摩書房, 1964, pp.7-54) の pp.49,50)

わたしは、思想的立場というものを信用しない者なので、すなわち自分の思想的立場は自己欺瞞と区別つかないものだと考える者なので、吉本隆明が述べる自身の思想的立場を吉本の本気のように受け取らない。わたしは、上の一節に、吉本隆明の<引っ込みのつかなさ>が自身に強い<窮屈>を、見てしまう。

なぜ「大衆」か？

反抗する者として自らを立てようとする者は、自分が反抗しないものを併せて立てることになる。——それをしなければ、「何でも反抗する者」になってしまうからである。

吉本隆明は、<自分が反抗しないもの>として「大衆」を立てる。

「大衆」を立てることは、無理を立てることである。

吉本隆明は、この無理を立てて自分を窮屈にする。

反抗する者として自らを立てたものは、自分が反抗しないものを併せて立てることになり、そして自分が立てたく自分が反抗しないもの>のために、窮屈な立場に陥る。

窮屈は、反抗することの罰である。

反抗するとは、この罰を甘んじて受けることである。

5.3 前衛イデオロギー

吉本隆明は、革命イデオロギーの「大衆」の概念を踏襲する者である。「大衆」を立てる者は、「大衆」の外に自分を立てる者である。「大衆」の外に自分を立てることに肯んずる者は、「前衛」である。吉本隆明は、「大衆」を立てることで、自身を「前衛」にする者である。

前衛は、自分のイデオロギーに「大衆」を回収しようとする。異なるイデオロギーの前衛は、「大衆」回収において、衝突する。なわばり争いになるわけである。

「パルタイ」批判で、吉本隆明はこれを演じる。吉本隆明は、そこでは前衛イデオロギーの者である。

時代は、革命的前衛イデオロギーが一つのファッションであった。それは、インテリジェンスのファッションだったのである。ファッションは、後になって振り返るとき、ファッションであったことがわかる。そのときファッションの中にいる者は、ファッションをくこれが自分の進む道>にしてしまう。

その後の時代の変化は、前衛イデオロギーを完膚無きまで陳腐化する。いまは、「大衆」を立ててこれの外に自分を立てようとする者はいない。しかし、吉本隆明は、「大衆」を引き摺ることになった。わたしはここに、<引っ込みがつかない>を見てしまうのである。

5.4 哲学の窮屈

菅野覚明『吉本隆明——詩人の叡智』の第3章「詩的思想の展開」は、吉本隆明の「哲学」の解説である。「詩的思想」のことばは、吉本隆明「ラムボオもしくはカール・マルクスの方法に就いての諸註」(『擬制の終焉』, pp.347-358)の中に出てくる。

この章を読んで思ったのは、「ずいぶん窮屈な哲学に従ってしまったんだなあ」である。学生の頃はこんなふうな受け取り方はなかったのに、いまのこの思いはわたしが年取ったせいである。

「窮屈な哲学」とは、「疎外」と「唯物論」である。

(1) 「疎外」

「疎外」は、つぎの逆溯行の図式で立てられる概念である：

歴史 ← 弁証法 ← 疎外

この「疎外」の哲学に即くことは、人の為すことすべてを「疎外」で説明することである。吉本隆明は、これを行う者である。

一つの<疎外>を立てることは、<疎外されるもの A >と< A の疎外態 B >の二つの存在を立てることである。

これは、フィクションである。

これをフィクションと言えないのは、「王様は裸」を言えないのと同じである。

裸の王様を裸だとしないのは、《難しく考えねばならない》と思うからである。

《難しく考えねばならない》を停止すれば、「王様は裸」があたりまえに言える。

吉本隆明の理論構築は、このフィクションを原理にするものである。『共同幻想論』『言語にとって美とは何か』は、このようになっている。

『共同幻想論』『言語にとって美とは何か』は、「固有時の対話」と同じである。

それは、詩である。

これを学術として読もうとすれば、「疎外」の概念枠組がちらついてきたところで、わたしは早々と降参してしまうことになる。

しかし、詩と定めるならば、読めるようになる。

わたしは、別におかしなことをここで言っているわけではない。

わたしたちは、学術的に正しいかどうかで、本を読んだり、歌を聴いたりするわけではない。

学術的には荒唐無稽な内容でも、楽しめる。

楽しんでいるそれを何と呼ぶべきか？

わたしは「詩」という言い方を、ここではしているわけである。

(2)「唯物論」

吉本隆明は、マルクスをとることを決めた者である。
即ち、マルクスに合わせた理論づくりを決めた者である。

なぜマルクスなのか？

そういう時代だったのである。

吉本隆明は、時代をはみ出るふうの思想家タイプではない。
時代密着タイプの思想家である。

マルクスをとることは、「唯物論」をとることである。
先に挙げた「疎外」も、そうである。

しかし、「唯物論」では「詩的思想」の論はやれない。

そこで吉本隆明は、「逆立」という方便をつくり出す。

「逆立」は、理論でもなんでもない。

オマジナイである。

一つの哲学をとることで自分を窮屈にし、窮屈をオマジナイでやり過ごす。そして、これが身についてしまう。

これは、思想をやる者がふつうに陥ってしまうことである。

吉本隆明も、この例外ではない。——否、典型というべきである。

註：数学の理論構築を例にして、「逆立」を解説する。

数学の理論は、それぞれ<卑近>が出自である。

いま一つの<卑近>に対しこれの数学をつくろうとする。

<卑近>は、数学的命題になる。

最初は大雑把な記述になるこの数学的命題を、要素的な命題へと

論理的に還元する。

還元は、上位命題に〈厳格な記述の仕方〉をフィードバックする。

この還元を、溯行が行き着くところまで続ける。

行き着いたところで、今度は理論の構成に入る。

還元の到達点を理論の出発点し、還元の逆を推論として進め、〈卑近〉の命題へと下降していく。

理論構築と理論は、形として、互いに他の逆立ちのように見える。

吉本隆明は、この「逆立」——「還元と推理の逆立ち」——をマルクスの『資本論』に認めようとする。

ただし、数学だと「還元と推理の逆立ち」はある程度説明できる内容になるが、『資本論』はそのようにはならない。

吉本隆明は、「逆立」をさらにマルクスの「唯物論」にまで拡張しようとする。

マルクスの「意識は意識的存在以外の何ものでもない」の逆立として自分の「存在は意識がなければ意識的存在であり得ない」を立てるわけである。

ここで吉本隆明が「存在は意識がなければ意識的存在であり得ない」を要するのは、「詩的思想」を「唯物論」と矛盾しないものとして立てたいためである。

5.5 「複雑系」のモデル

菅野覚明『吉本隆明——詩人の叡智』の「第2章 固有時との対話」は、吉本隆明にとって「複雑系」は量子物理がモデルになるものであることを、わたしに教えてくれた。

わたしは、「複雑系」といえば生態系を思い浮かべる。生態系が、わたしの「複雑系」のモデルである。

「複雑系」のモデルの違いは、人間を主題化する仕方の違いに現れる。モデルを量子物理にすると、人間は〈位相〉化・〈主体〉化される。モデルを生態系にすると、人間は卑小化（〈一生懸命なもの・かわいいもの・愚かなもの〉化）される。

5.6 自然

吉本隆明には、住み処が東京下町であることを、進んで自身のイメージにしているようなところがある。

在の者が下町に入ると、「ここに一生棲む人がいる」の感慨がわく。新幹線で東京から横浜の間、家屋密集地帯を見るときあの感じである。このイメージがさらに進めば、「下町に一生棲む者ゆえに出てくる論考」が吉本隆明の論考のイメージになってくる。

実際、吉本隆明の論考には、自然が出て来ない。

自然は、吉本隆明が自分の守備領域の外に措くものである。

しかし、詩人としてこれで済むのかというと、厳格には、やはり済まない。

自然は、人のすべてのことに関わってくる主題である。

自然を主題にできないとは、定めしおおきな間違いをやってしまうということである。

そこで、詩人として自身を立てようとする者なら、自然を主題にできることを自身に課すことになるのが、道理である。

自然を主題にできるためには、自然を主題にできるカラダをつくる。

特に、自然を見る目をつくる。

画家は、デッサンを自分に課す。それは、デッサンがくものを見る目>をつくる方法だからである。この目をつくっていないうちは、ものは見えていない。

自然を見る目づくりで「デッサン」にあたるものは？

エコロジーの修行である。

この修行のまえは、自然は見えていない。

吉本隆明は、エコロジーについては、エコロジストの欺瞞性を主題にする者であるが、エコロジーを主題にする / できる者にはならなかった。

5.7 加齢

「吉本隆明」とは、〈書く〉を方法として——即ち《習慣の書き方を拒む》《本当のことを書いて示す》を行為する自分を以て——自身を保とうとする者のこと、ないしこの方法そのもののことである。

〈書く〉の様態は、年齢 / 経験値と関わってくる。

若輩は、世界が小さいので、「自分が正しい」でないと満足できない。

〈書く〉を、敵を立てて闘う行為にする。

年を取ることは、世界の広いこと・ものごとの複雑なこと・個の多様なこと——そしてこれらの反照として、自分の卑小が見えてくること——なので、「柳緑花紅真面目」を境地とする者になっていく。

〈書く〉を、（敵を立てて闘う行為ではなく）自分の力量を測る行為——自分との向き合い——にする。

加齢は、〈書く〉が闘わないものになることである。言い換えると、「墮落」することである。

ただし、若いうちに、引っ込みのつかない立場に自分を自ら立たせてしまった者——引っ込みのつかない立場に自分が立っていると思いつつ——うになった者——は、〈引っ込みがつかない〉の構えを習慣にしてしまう。この場合は、加齢に伴う〈書く〉の自然な「墮落」が起りにくい。

吉本隆明がこの点でどうであったのかは、「引っ込みがつかない」の節に引き続く形で、保留である。

論点のメモということで、この一節を設けておく。

この「論点メモ」は、わたしが吉本隆明に対しひっかかるものをもつからなのであるが、「親鸞」がそれである。吉本隆明の「親鸞」の持ち上げ方・ごまかしたような論の閉じ方に、どうしてもなにか欺瞞を感じてしまうのである。

「保留」は、わたしのうちでこの点に決着がつくときまでである。

6 無理矢理

6.1 愚の退治

6.2 自家撞着

6.3 反の反で、肯定

6.1 愚の退治

『情況へ』(宝島社, 1994)に、「情況への発言」(『試行』51号～73号(1979～1994))が収められている。

「情況への発言」は、吉本が賢者の構えで愚者を罵倒するスタイルになっている。

まさに罵倒であるので、読む方は「これはあぶないなあ」とハラハラして読むふうになる。

また、「罵倒される方は、よほど面食らい、そして罵倒されたままの格好ではいられないから、対応策をいろいろ考えねばならないだろうなあ」と想像されて、罵倒される側への同情を禁じ得なくなる。

また、別に嘸みつかなくてもよかるうほどの者を執拗にやっつけるのを見ると、「これは人を萎縮させるやり方で、よくないなあ」の思いになる。

どうしてこうなるのか。

ロジックとして、つぎのように思っていることになる：

罵倒は、有効。

即ち、賢は、愚を罵倒することで、愚をまいらせることができる。

いま行っていることは、賢が愚をまいらせる闘いである。

賢愚は、善悪であり、白黒である。

白黒を立てるのは、イデオロギーである。

「情況への発言」の吉本は、イデオロギーである。

白黒でものを考えるのは、若さである。

経験値は、白黒から脱けさせる。

単純に、歳をとれば、白黒を脱げる。

本来なら、『最後の親鸞』(春秋社, 1981年)の吉本は、この相でなければならぬ。なぜなら、「最後の親鸞」は、「是非も無し」の境地のことであるから(註)。

しかし吉本は、こうではない。

吉本にとっては、「是非も無し」は、「大衆」に於けるものである。

吉本は、インテリを「大衆」から区別する。

共産主義革命は必ずインテリの弾圧・虐殺になるが、インテリに対する吉本の嫌悪・容赦の無さはこれと同タイプである。

吉本は、この体質を引き摺っている。

これが、吉本を独特のものにしている。

この体質を考えに入れないと、吉本を理解することはできない。

吉本においては、「最後の親鸞」と「情況への発言」が共存する。

この共存を見ることが、「吉本隆明」を見る仕方である。

註：吉本は「最後の親鸞」を持ち上げるが、「最後の親鸞」は、歳をとったただれもが至るところの「是非も無し」の境地に過ぎない。思想に、すごい思想など無い。有るのは、メチャクチャな思想である。メチャクチャが収まるのが、思想の終点である。思想の終点は、単にゼロに戻ったということである。

6.2 自家撞着

自分は、自分が批判している相手と大差ない者である。

批判は、対立軸をつくる。

対立軸をつくることは、《大差ないのに、差を無理矢理つくる》の無理をすることである。

そして、無理をすることは、誤りをするることである。

自分と大差ない相手に対する批判は自分にも妥当する。

批判は、自分に返ってくる。

批判は、自家撞着になる。

批判は、「おまえはそれほどのものか？」の問いが自分に返ってくる。

そしてだれも、「それほどのもの」になることはできない。

そこで、批判を考えるときは、自分が偉そうにならない批判のテクニックを、自ずと考えることになる。

吉本は、考えない。

相手をやっつけることだけを考える。

これで相手がまいるわけではないが、やっつけ続けることを自分の生きる形にする。

吉本は、自分が全肯定するものとして「大衆」を立てる。

「大衆」を立てると、《大衆でない者は自分の周りからいなくなって構わない》になる。

大衆でない者とは、「インテリ」である。

吉本の批判は、相手と絶交の関係になるところまで行く。

吉本の批判が罵倒であるのは、吉本にとって批判はく相手と絶交の関係になる>だからである。

吉本が批判で自家撞着にならずに済むのは、批判がく相手と絶交の関係になる>だからである。

6.3 反の反で、肯定

反に反を返せば、肯定になる。

吉本は、これをやってしまう。

吉本は、反・反原発をやる。

反原発は原発の危険を唱えるから、これに対する反は「原発に危険は無い」になる。

実際、吉本はつぎのように言う / 言わされてしまうことになる：

ソ連原発事故のようなものは確率論的にはあと半世紀は起こらない。半世紀も人命にかかわる自己が起こらない装置などほかにないし、航空機や乗車事故よりも危険がおおいとも思わない。大衆や婦女子の恐怖心に訴えるソフト・テロなど粉碎すべきだし、改廃を論議し市民の運動としたいなら大衆の理性と知性に訴えられなければ、そんなものは反動にすぎないのだ。

……

原子力を発電に利用しようとする装置を考案し、製作し、作動させて、電力エネルギーの30%供給までチェルノブイリ規模のような人命事故を起こさなかった技術の現状を、否定し廃棄すべき根拠がない。

……

原則は、原発の科学技術安全性の課題を解決するのもまた科学技術だということだ。それ以外の解決は文明史にたいする反動にしかすぎない。

……

文明史の到達点としての原発を否定するのは、いいかえれば焼石や木片マサツ、風車や水車から蒸気機関というようなエネルギー獲得の手段史として原子力発電（所）をみたばあい、これに反対し否定するのは人類の文明史に対する蒙昧と反動だ。

（『試行』68号、1989年2月）

<反反>の要点は、つぎのものである：

反反は、肯定を引き受ける羽目になる。

肯定は、危ういものを確実な根拠に仕立てる羽目になる。

<反・反原発>では、つぎが根拠に仕立てられている：

「大衆の理性と知性」「技術の現状」「科学技術」「文明史」

反には反を返してはだめなのである。

返すべきは、超である。

論理階梯を一段上げるわけである。

すなわち、つぎの論をつくることになる：

「ひとは、危険な原発をやめることより、
電気を潤沢に使えることの方を選ぶ。」

7 「吉本隆明」批評作法

4.1 生き様

7.1 生き様

吉本隆明は、「吉本隆明」を生きた者である。

吉本隆明は、死ぬまで「吉本隆明」をやれた。

すごいもんである。

「すごいもんだ」が、吉本隆明に対する批評・批判・評価の形である。

華々しくデビューしてしまったボクサーが死ぬまでボクサーでいたら、

それは掛け値無しに「すごいもんだ」となる。

何に、「すごいもんだ」と思ってしまうのか？

生き様に、である。

吉本隆明は、これである。

註．学術的にどうたらこうたらを言うのは、「吉本隆明」批評の作法ではない。

しかし、生き様で「すごいもんだ」の評価をするのは、変なぐあいになる。

生き様を評価の対象にしたら、例えば虐殺した人間の数が半端でない政治指導者——スターリン、毛沢東、ポルポトの類——はすごいもんだになってしまう。実際、すごいわけである。

そして、吉本隆明の生き様を「すごいもんだ」と言い出したら、斬った人間の数、斬り方の容赦なさのすごさ（無惨さ）を、自ずと思ってしまうことになる。

吉本隆明の生き様に感じる「すごいもんだ」は、どんなふうに捉えることになるものか？

デビューで大ヒットしてしまった者は、その大ヒットの形を、パブリック・イメージとして自分にずっと負う者になる。

これを生涯ずっと負い続ける者は、「すごいもんだ」である。

吉本隆明の生き様の「すごいもんだ」は、これにあたる。

吉本隆明は、自分を引っ込みのつかない格好にしてしまい、終生これを引き摺る。

そして「下手こき」をやってしまう。

しかし、初期の大ヒットをずっと負うとは、こういうことである。——「是非も無し」である。

おわりに

わたしの「吉本隆明」は、1960, 70年代の吉本隆明の著作である。その後の「吉本隆明」は、「いまはどうなっているんだろうか」「おっ、あいかかわらずがんばっているぞ」「がんばれ」の心情を寄せる対象であった。

吉本隆明論を「吉本隆明」論としてやろうとしたが、自分にとっては意外にも、吉本隆明をずいぶん持ち下げるふうの内容になってしまった。理由として、つぎの三つが挙げられる：

1. 吉本隆明のその当時立てた枠組が、時代の変化の中で陳腐化するものであったこと。
2. 吉本隆明の立てる無理な立場は、意固地な相で懸垂したままである他ないこと。
3. わたしが、吉本隆明の数冊の著書の読者でしかなく、その著作も6, 70年代のものに偏っていること

1. 「吉本隆明のその当時立てた枠組が、時代の変化の中で陳腐化するものであったこと」について

吉本隆明の思想は、テーマは普遍的でも、道具立てにおいて時代性が強い。

吉本隆明の思考枠組は、畢竟、革命イデオロギーである。これで時代性を強くすることになった。

「吉本隆明」は、マルクス者とマルクス主義者を区別し自身をマルクス者に位置づけるタイプのひとりであったが、その後の時代の変化は、そんな区別が何の意味もなくなり、両者がいっしょくたになる場所もまた

小さくかすんで目に入らないそんな風景を現出する。

わたしの世代の後の世代になると、吉本隆明の著作は、内容では読めたものでなくなる。

そしていまの若い世代には、吉本隆明は知ることにもならない存在になる。

ここに、「古典」のことばが浮かんでくる。

吉本隆明が時代性を強くしてしまうのはなぜか？

それは、《何かに託す》をやるためにである。

「何か」は、「マルクス」であったり、「大衆」であったり、「科学」であったり、である。

託せるものなど無いので、これをやれば必ずしくじるし、時代の変化の中で陳腐化する。

しかし、吉本隆明は、《何かに託す》という構えに意固地になることを自身に強いる者である。

この拘りは、「吉本隆明」の要素である。

この拘りをとってしまえば、「吉本隆明」は無くなる。

2. 「吉本隆明の立てる無理な立場は、意固地な相で懸垂したままである他ないこと」について

上の 1 と内容的に重なるが、吉本隆明は無理な立場を表明する。

「大衆」「意識の实在」はそれである。

無理な立場は、懸垂したままになる。

懸垂したままは、意固地の相になる。

＜時の人＞の後の吉本隆明は、「意固地でやっている」がわたしの勝手なイメージになった。わたしに彼の著作を追わせる気にさせなかったところのものは、正直、これである。

3. 「わたしが、吉本隆明の数冊の著書の読者でしかなく、その著作も 6, 70 年代のものに偏っていること」について

吉本隆明は、死ぬまで「吉本隆明」をやれた者である。

それは、「すごいもんだ」となるものである。

この「すごいもんだ」は、＜時の人＞の後の吉本隆明を追ってやらないと、評価できない。そしてわたしはこれをしていないので、吉本隆明の「すごいもんだ」の評価はできないわけである。

吉本隆明の「すごいもんだ」の評価は、本論考の趣旨ではない。

本論考の趣旨は、「吉本隆明」とは何かを押さえることである。

では、《「吉本隆明」とは何かを押さえる》の方は、「吉本隆明の数冊の著書の読者でしかなく、その著作も 1960, 70 年代のものに偏っている」でやってよいことなのか？

「吉本隆明」論をやるために吉本隆明の多くの著作にあたるということは、わたしのしないことである。それは、わたしの時間の使い方ではない。

これについては、二通りの理屈が立つ。

理屈 1

著書は、〈方法〉が生成する。

著書は、〈方法〉の外延である。——翻って、著書の内包が〈方法〉である。

〈方法〉にアクセスする方法は、「著書にあたる」である。

実際、著書をなぜ読むかという、〈方法〉を捉えるためである。

このとき、「著書にあたる」は、「くまなく著書にあたらねばならない」ではない。

どの著書にどの程度あたればだいたい十分かは、経験をつむうちにだいたいわかってくる。

あとは、「時間・労力」(コスト)と「欠落のリスク」のトレードオフのはなしになってくる。

「くまなく著書にあたらねばならない」を言う者は、「〇〇研究者」である。

彼らは、「くまなく著書にあたる」ことを生業にしている者なので、それに「時間・労力」(コスト)を使うことがまさに「時間・労力」(コスト)の使い方なのである。

理屈2

わたしは、《多くの文献にあたるのが、論をつくる要件である》を、わたしの尊重しない習慣の一つにしている者である。

この習慣は、ひとに「ものを書くな」「ものを言うな」を強いる。

これを通用させた組織・社会がどんなひどいことになりそうか。

ひとは自分の阿呆の丈で阿呆を言えばよいのであり、実際こうなるのみである。

踊る阿呆に 見る阿呆

同じ阿呆なら 踊らにや損々

さて、わたしの「吉本隆明」論は吉本隆明をずいぶん持ち下げるふうの内容になったが、さらに、「ふつうと比べると」ということであるが)ひどく分量の少ないものになっている。

実際、読者は「どこに吉本隆明がいるのだ！」と苛立つだろう。

しかし、本論考は吉本隆明の構造的な捉えが主眼であるから、わたしにはこれでよいのである。

こまごまやりだすと、構造が見えなくなる。

実際、ここで述べていることのそれぞれについて含蓄をせつせと掘り出すことをやれば、けっこうな分量になるわけである。

最後に反省であるが、吉本隆明に対し「吉本隆明」を措くという最初の目論見は、論のしまいにはグチャグチャになってしまった。

(2013-03-24 時点での閉め)

宮下英明 (みやした ひであき)

1949年、北海道生まれ。東京教育大学理学部数学科卒業。筑波大学博士課程数学研究科単位取得満期退学。理学修士。金沢大学教育学部助教授を経て、現在、北海道教育大学教育学部教授。数学教育が専門。

註：本論考は、つぎのサイトで継続される（この進行に応じて本書を適宜更新する）：

http://m-ac.jp/thought/yoshimoto/naze_kaku_ka/

「吉本隆明」とは何か？

——「なぜ書くか」について

2013-03-20 初版アップロード (サーバー：m-ac.jp)

著者・サーバ運営者 宮下英明

サーバ m-ac.jp

<http://m-ac.jp/>

m@m-ac.jp
